

愛知における木村定三と熊谷守一のネットワーク

愛知県美術館 石崎 尚

はじめに

愛知県名古屋市に生まれた木村定三（1913～2003）が、熊谷守一（1880～1977）を語る際には避けて通ることのできない重要なコレクターであることは、愛知県美術館（以下、当館）が彼のコレクションを収蔵し、その名を冠した木村定三コレクションとして公開するようになって以降、広く知られるようになってきた（以下、特に断りのない場合、コレクションとは上記の木村定三コレクションを指す）。だが、木村は単に資金力にまかせて熊谷の作品を買い集めた訳ではない。弱冠25歳で初めて熊谷の作品に触れたときから、その純粋な世界観に魅入られた木村は、熊谷との交流を通してその人柄に心底惚れ込んでいった。そして自らが熊谷の作品を集めるだけでなく、友人知人たちに熊谷の魅力を説いて回り、木村スタイルとでもいうべき熊谷ファンを身の回りに増やしていった。また、百貨店などと協同して熊谷の展覧会をプロデュースし、さらには画集を編集・発行して自らの信ずる熊谷作品の真の価値を広く世間に伝えようとしたのである。

一人の熊谷守一ファンとして出発した木村定三は、コレクター、プロデューサー、支援者、解説者など、いくつもの立場で熊谷と接したが、忘れてはならないのは、その根底には年の離れた友人として、汲めども尽きぬ熊谷への敬愛があったことである。熊谷と親しくなってきた木村は、東京の熊谷宅に足しげく通い、また熊谷を名古屋の自宅に度々招いていたが、箱書きを依頼するなどの用事はむしろ口実としてあり、実際は熊谷との美術談義にひたる時間をこよなく愛していたのだろう。

こうした木村と熊谷の交流については、関係者などの思い出話などで断片的には伝わっていたものの、その具体的な実態についてはこれまであまり知られてはいなかった。しかし、現在公的なアーカイヴに残されている両者の書簡のやり取りを整理することで、二人が最初に会って以降、どのように関係を進展させていったのかをうかがい知ることが出来るのである。

往復書簡について

木村から熊谷に宛てられた書簡は、岐阜県歴史資料館が所蔵する熊谷宛の書簡約2,200点の中に含まれている。これは長男の熊谷黄氏から2003年に同館に寄贈されたもので、これらをまとめた目録が翌年に発行されているが¹、これを見ると熊谷の異常なまでの物持ちの良さ

1 『岐阜県所在史料目録 第53集 熊谷守一文書目録』岐阜県歴史資料館、2004年。

に、ただただ驚くばかりである。展覧会の案内状から年賀状の類に至るまで、青年期から最晩年までのありとあらゆる郵便物を可能な限り保管していたようである。

一方、熊谷から木村に宛てられた書簡は、当館が所蔵しているものである。これは木村定三コレクションが何度かに分けて寄贈された際に、あるものは書簡類のひとつまとまりとして受け入れられ、またあるものは作品の軸箱の中に一緒にしまわれていたものもある。熊谷の物持ちの良さには及ばないものの、当館には作家から届いた木村宛ての書簡類が数十通収蔵されており、その中でも熊谷からのものが一番多い。木村と熊谷の絆の深さがこの事実からもうかがえる。筆者はかつて、岐阜県美術館において「守一のいる場所 熊谷守一展」が開催された際に、二つの館にそれぞれ所蔵されていた書簡を突き合わせて整理することで、木村と熊谷の交流の実態を明らかにすることを試みた²。そして大変有難いことに展覧会終了後には、木村美保子氏が手元に保管していた熊谷の書簡が追加で寄贈され、これによって往復書簡から読み取ることの出来る内容はさらに豊かになったのである。

本紀要に掲載した「木村定三と熊谷守一をめぐる往復書簡（翻刻）」(025(107)～001(131)頁)は、現時点で確認できた全ての書簡の内容を踏まえた上で構成しているが、「木村定三と熊谷守一の往復書簡」ではなく、題名にわざわざ「をめぐる」と入れたのは、木村と熊谷以外の者が記した書簡も一部含んでいるからである。その意味で厳密には往復書簡とは呼べないのであるが、敢えてそれらを掲載したのは、第三者による書簡の中にも木村と熊谷の交流に深く関わる内容が少なからず見つかったからである。これらの内容も加味することで、二人の交流の軌跡をより立体的なものとして観察することが可能になり、結果として木村と熊谷の二人だけにとどまらず、彼らを中心とする愛知県内の人脈が浮かび上がることになった。愛知という土地と熊谷との知られざる関係性をとどめておくために、収録することとした。

結果として木村から熊谷に宛てた書簡が26通、熊谷から木村に宛てた書簡26通、それ以外の書簡が14通で、合計66通の書簡を収録することになった。その詳細については翻刻を参照して頂きたいが、本稿では往復書簡の解題として、あるいはこの間の調査の覚書として、往復書簡を読み解くことで明らかになる事柄をいくつか論じていくこととする。

最初の購入作品について

木村自身が度々振り返っているように、熊谷との最初の出会いは1938年12月に、名古屋丸善で行われていた「新毛筆画展覧会」に木村が訪れたことから生まれている。その際に彼は、会場で《蒲公英に蝦蟆》(JJ200200035000)、《蝦蟆に蟻》(JJ200200034000)、《富士山に蕃南瓜》(M236)の3点を会場で購入した、というのが従来の見解であった³。しかし、書簡0010および0020の内容を信頼する限り、会場で《蒲公英に蝦蟆》、《蝗》、《鶯》の3点を購入し、展覧会の終了後、思い直したように《蝦蟆に蟻》を追加で入手すべく、熊谷に問い合

2 拙論「木村定三と熊谷守一」『守一のいる場所』求龍堂、2014年、204～215頁。

3 牧野研一郎「木村定三コレクションの熊谷守一」『熊谷守一 木村定三コレクション』愛知県美術館、2004年、8頁。

わせた、というのが実際のところのようである。ただし、《富士山に蕃南瓜》(M236)も同展の出品目録にあり、かつ現在のコレクションに含まれているので、どこかのタイミングでは購入されたのであろう。一方、《蝗》、《鶯》の2点については同じく出品目録に含まれているにも関わらず、現在のコレクションにはそれらしいものが見当たらないため、詳細は不明である(書簡0040の時点では《鶯》は木村の妹が所持している)。

《蒲公英に蝦蟆》と《蝦蟆に蟻》の2点は、木村にとって記念碑的な最重要作品だが、この評価については興味深い変動が見られるので触れておこう。木村はコレクションを貫く基本的な概念として、「法悦感」と「厳粛感」の二つを掲げているが、《蒲公英に蝦蟆》は「法悦感」を、《蝦蟆に蟻》は「厳粛感」をそれぞれ典型的に指し示すものとして木村は考えていた⁴。しかしながら、《蒲公英に蝦蟆》は展覧会を見たその場で購入しているにもかかわらず、《蝦蟆に蟻》については初見でそこまでは気に入らなかったためか、前述の通り展覧会終了後に改めて問い合わせた入手している。また、書簡0040にあるように、手中に収めた5点の作品の内、最も優れているのは《蒲公英に蝦蟆》であると当時は考えていたようだ。やがて時間が経つにつれて《蝦蟆に蟻》は《蒲公英に蝦蟆》に匹敵する価値を持つ作品として格上げがされたようである。

このことでも明らかのように、木村の作品鑑賞・批評における基本的な立場は、相対評価で良し悪しを見極めていく、というものである。熊谷と出会って間もない時期の書簡0040に早くも登場するように、手持ちの熊谷作品の中でどれが一番優れているかという議論をして、兄弟で楽しんでいるのである。その後もナニナニよりはコレコレの方が上だと思う、という論法は書簡の中でも、そして公刊された木村の文章にも頻出する。

「私の一生の念願としては、既往画家の格付をしようと言う大望を抱いている者であります」⁵。これは公表された木村の文章としては最初のものであるが、自らの審美眼を絶対視する姿勢が早くも確立されている、まさにコレクター宣言とでもいうべきものである。画家の番付として知られる「古今南画要覧」などのように、いわゆる見立番付によって格付けしていく文化は江戸時代後期から広まっていったと言われているが⁶、自らの基準に従った木村定三版の画家番付を作る、という目標は、木村の文人趣味をよく表している。そして熊谷と出会って以降ずっと、木村にとっての熊谷守一はピカソと並んで常にこの番付の頂点に位置する画家であり続けたのである。

作品の来歴について

この往復書簡によって明らかになる事実の中でも、特に重要なのは熊谷作品の制作年や出品歴、入手経路であろう。そして所蔵館である当館にとって、作品に関する基礎的な情報が明らかになることが、調査・研究を進めていく上での利点であることは改めて言うまでもな

4 木村定三編『熊谷守一作品撰集』日本経済新聞社、1969年、3~4頁。

5 木村定三「価値判断の物指」『南画研究』第2巻第12号、中央公論美術出版、1958年、8頁

6 見立番付の内、特に美術に関するものについては下記に詳しい。瀬木慎一『江戸・明治・大正・昭和の美術番付集成 書画の価格変遷二〇〇年』里文出版、2000年。

い。

書簡0080で木村定三の弟、四郎が懇願している柿の絵というのは、コレクションの《柿》(M2460) (図8) のことだろうか。だとすると、四郎の持ち物だったこの絵を、後に定三が引き継いだことになる。この作品に関して言及する他の書簡が見当たらないため、制作年に関しては不詳のままだが（とはいえ、書簡が書かれた1939（昭和14）年から1、2年以内である可能性が高い）、書簡0040にあるように木村定三その人だけではなく、弟（四郎）や妹と共に互いに熊谷作品を所有しあって楽しんでいる有様が浮かび上がってくる。このことは、現在は木村定三コレクションとしてひとまとめになっている作品群に関しても、ただ一人のコレクターによって形成されたものではなく、複数の人間が関わりあって徐々に形作られたという意味において、人格的な広がりを含んだものとして捉え直す必要があることを我々に教えてくれる⁷。

書簡0160からは、書簡0040で依頼した《観世音菩薩》(M211) が届いた後、その出来栄えに満足した木村が、追加で《不動明王》(M201) を依頼し、双幅に仕立てたことが分かる。実際にこの2点を並べて見てみると、双幅としたことがよく理解できる（図9）。2点が対になる作品といえ、先述したように《蒲公英に蝦蟇》は法悦感を、一方の《蝦蟆に蟻》は厳肅感を代表するものとして考えられていたが、この二点も双幅として考えられていた節がある。だとするならば先に《観世音菩薩》を得た木村は、それが法悦感のある佳品であることを認めると同時に、それと対になる厳肅感の作品を求めて《不動明王》を依頼したのだと考えられる。同様に前述の《蝦蟆に蟻》の件は、恐らくは法悦感の《蒲公英に蝦蟆》の対になるものとして後から買い足したものののだろう。つまりこの時期（1940・昭和15年頃）には既に、法悦感と厳肅感という対概念は完成されつつあったようだ。

書簡0370に登場する屏風は、文中の図解（図10）を見る限り《秋冬貼交屏風》(M1854) (図11) を示すものと考えてよいだろう。そうすると、この作品は1941（昭和16）年5月15日～17日まで開催された「第四回双弦会日本画展」に出品されたものであり、制作年も1941（昭和16）年と推定できるのである。この作品は屏風仕立てになっており、紙に描かれた作品がいくつも貼られているという、熊谷としては大変珍しい作品なのであるが、双弦会からの依頼によりこの作品が生まれたという背景が明らかになった。

入手経路に関していえば後年になってからはさておき、少なくとも交流の初期においては、木村は作品を熊谷から直接買っていたようである。前述した最初の丸善展での4点は丸善で購入したと考えられるが、自ら入手の可否を問い合わせた《蝦蟇に蟻》以降は、手紙で発注して作品を郵送で受け取り、書留で代金を支払うということが習慣になっていった。これは一つには、作者に直接好みの画題を伝えて、制作を依頼することを好んだからだろう。現代風にいえばオーダーメイドの通信販売に近い。そして紙を小さくまとめて郵送することの出

7 木村定三の父である定治郎は、書画骨董の収集を趣味とし、現在コレクションに含まれる与謝蕪村の《富嶽列松図》は元彼の持ち物であったという。前掲『南画研究』、8頁。また兄の定二も定三に先立ってコレクションに手を染めていたということから、家族同士で作品に触れ親しむ習慣は、家庭環境によって育まれたものといえよう。前掲『熊谷守一 木村定三コレクション』10頁。

来る日本画は、まさにこの通信販売に最適だったのである。文書目録によれば、画題を指定して制作を発注するコレクターは木村以前にもいたようであるが⁸、木村は一度届いた作品ですらも場合によっては返品するという姿勢を貫いている。好みの作品、優れた作品を集めることに執着する、いわばコレクターとしての強情ぶりは往復書簡の端々からうかがわれるが、逆にそれを許す熊谷との関係が早くから築かれていることに驚きを禁じ得ない（書簡から読み取る限り最初の返品は1943（昭和18）年7月であるが、最初に出会ってから4年半ほどしか経過していない）。

そして熊谷から作品を直接購入した第二の理由も、まさにこのように作者とやりとりを続けることによって、作品を購入するだけでなく、密接な人間関係を作り上げ、友人として熊谷に近付くことを願っていたからに他ならないだろう。木村の望みは見事成就し、二人の友情はその後、熊谷が世を去るまでの40年近く続くことになる。中でも特に重要なのは、木村が名古屋で企画・主催した、熊谷の一連の個展であろう。これについては木村が以下の様に振り返っている。「戦後、友人の御園座社長猪飼さんと共同で、熊谷さんの展覧会を十数回名古屋で開きましたが、全部非売品の展覧会としました。その主たる理由は、売るには勿体ないからですが、他の理由は、熊谷さんの作品の紹介を通じて熊谷芸術を名古屋の人々に深く浸透させ、名古屋の美術愛好家の鑑賞眼を向上させることを目的としたもので、事実相当効果があったと思います⁹」。これらの展覧会については、これまであまり詳しいことが知られていなかったが、今回の往復書簡にはその案内状と思われるハガキ（図18）が含まれるほか、戦前に丸善で行われた日本画展に関しても、木村が積極的に主導して開催にこぎつけた経緯がよく分かる記述がある。熊谷ファンを名古屋に増やした最大の功労者は木村だが、その実態についても書簡が明らかにしてくれることは多いのである。

熊谷以外の作家について

往復書簡からはコレクションに含まれる熊谷以外の作家についても、作品の入手方法や木村の評価をうかがい知ることが出来る。

書簡0020で早くも登場する小川芋銭（1868～1938）については、書簡0070でも「絶筆に近き絵」（図12）を入手したと述べている。芋銭は1938（昭和13）年12月17日に死去しているが、このタイミングは木村と熊谷が最初に出会った時期と丁度重なるので、奇遇を感じずにはいられない。仮にそれ以前から既に芋銭の収集を始めていたとするならば、芋銭の新作が望めなくなったのと同時期に、彼の精神性を受け継ぐような画家に出会ったのだから、木村にとってはまさに運命的な出会いであったろうと想像される。

書簡0040で木村は仏画の制作を依頼しているのだが、それは仏画において当代随一の村上華岳（1888～1939）に依頼する術がないので代わりに熊谷に依頼するのだという。ちなみに現在のコレクションには華岳の仏画《仏立像》（M1889）（図13）、《夜摩天》（M1888）の

8 例えば田村謙寿なども手紙で画題を指定している。前掲『岐阜県所在史料目録 第53集 熊谷守一文書目録』、29頁。

9 木村定三「熊谷守一の人と芸術」『新美術新聞』美術年鑑社、1972年11月1日号。

2点を含む計4点の作品が含まれていることから、木村は後に念願を叶えたようである。この時には華岳への仲介を諦めているが、別の機会に実際に仲介を頼んでいる例が書簡0130である。「大きさは六号位で何か馬の絵」と、馬の絵で有名な坂本繁二郎（1882～1969）の作品を所望している。書簡0460には熊谷からの返信があり、坂本から熊谷に宛てたものとして、文書目録1032（1940・昭和15年6月28日）には木村の依頼を承知する旨の、また文書目録1139（1940・昭和15年10月14日）には完成が遅れている事を詫げる文が見られる。だが、文書目録1032（1940・昭和15年6月28日）の中で坂本は木村からの依頼「雀の絵」を承知した、と書いている。何らかの行き違いがあったのか、いつの間にか馬の絵が雀の絵になりかわっていたらしい。馬ではなく雀だと思ったのならば坂本の難儀が思い浮かぶ。この後、坂本のパリ行きなどもあり、熊谷に宛てた手紙は戦後になるまで見当たらない。現在のコレクションに坂本作品が残っていないこともあり、この依頼はうやむやになってしまった可能性がある。

愛知における二科会人脈

熊谷は戦前は二科会で活躍し、その純朴な人柄と単純化された画風は多くの画家仲間から慕われていたのだが、愛知における熊谷をめぐる人脈も、当然のことながら二科会の仲間を中心に広がっていったようだ。その大きなきっかけとなっているのは、書簡0360にあるように双弦会の東本春水（1910～1988）が企画し、熊谷、横井禮市（1886～1980）、北川民次（1894～1989）の三人の二科会会員が参加した「趣味の陶画三昧」展である。昭和16年4月に開催された同展は、村瀬善九（生没年不詳）が作陶した陶器に、熊谷らが絵付けして焼いたものを展示、販売したようである。書簡の案内を見る限り400点近い作品が出品されていることから、熊谷らは瀬戸に数日間滞在して制作したものと推測される。

北川民次はメキシコから帰国後、1937（昭和12）年8月に上京し、1943（昭和18）年11月に愛知県瀬戸市に疎開するまでは豊島区长崎仲町1の241（1940・昭和15年からは長崎2の25）に住み、熊谷の自宅に近かったこともあり親しくしていた¹⁰。

横井禮市（礼以）は熊谷の東京美術学校の後輩で、二科の審査員を共に務めたり、熊谷を自宅に泊めたりした間柄だったという¹¹。1927（昭和2）年に故郷の愛知県に戻り、1930（昭和5）年からは名古屋の緑ヶ丘洋画研究所の指導主任を務めて後進の育成に励み、戦後は熊谷とともに二紀会を創立した。

大分県の国東半島に生まれた東本春水は、1929（昭和4）年に愛知県岡崎師範学校を卒業して1952（昭和27）年に上京するまでは、名古屋で教員生活を送りながら二科会への出品を行っていた。二科会で顔見知りになっていたためか、1941（昭和16）年6月には名古屋丸善で北川との二人展、「北川民次、東本春水諸国祭礼風俗小品展」が開催されている。

10 北川によれば、熊谷宅に度々通って墨のすりかたや筆のおろしかたなどを手始めにいろいろ教えを受け、長男が生まれた際には鍾馗の絵を描いてもらったという。北川民次「痲癩を画布に」『毎日新聞』中部版、1976年10月5日夕刊1面。なお、この鍾馗の絵は、木村自身が編集した画集に収録されている。前掲『熊谷守一作品撰集』、図版72。

11 横井礼以「生活にじみ出る」『毎日新聞』中部版、1976年10月7日夕刊1面。

当時の熊谷にとって、名古屋はまだ個展を2回開いただけの土地である。それゆえ「趣味の陶画展」の顔触れを見る限りでは、熊谷を慕い、かつ愛知県に縁のある3人の二科会の後輩画家達（北川は妻の実家のある瀬戸を度々訪れていた）が熊谷を誘った企画のように思われる。だが意外なことに、熊谷がはるばる愛知に訪れているというのに、どうやら木村はこの輪には直接的には関わっていなかったようだ。しかしながら書簡0510にあるように、木村が北川の個展を訪れるなど、陶芸展のグループと木村の間には一定の交流はあったようである。この時、作品は買わなかったがその代わりに知人を沢山紹介した、というのがいかにも木村らしいが、後に入手する機会があったようで、コレクションには北川の水彩1点が含まれている。一方、北川よりもむしろ横井の作風を木村は好んだようで、コレクションには油彩18点、水彩1点の計19点が残されている。東本については書簡0550を見る限り、木村とは一時期親しくしていたようだが、作品はコレクションには含まれていない。

書簡0390で木村が「蠶螂の茶盃」を含む志野茶碗4点について、「先生に絵を描いて頂きました」と述べている。これは同年4月に行われた先述の、趣味の陶画三昧展のための制作に同行したのかと思いきや、書簡0330で熊谷は名古屋の木村宅には寄れずに帰ったと述べているため、どうやら出品作の制作に立ち会った訳ではないらしい。それ以前にそもそも、趣味の陶画三昧展の作陶は村瀬善九であり、4点の志野茶碗は早川春泰（生没年不詳）であるため、訪れた工房からして違うということが分かる。そのため、木村と熊谷は、陶画展出品作の制作とは別に、瀬戸の工房を訪れたということが分かる。

ならば熊谷はどうしてわざわざ短期間のうちに二度も絵付けのために、しかも同じ瀬戸の異なる陶工のもとに、東京からはるばる赴いたのだろうか。木村は趣味の陶画展で入手した作品について「平面の紙に描いた絵とは別趣の面白さがある」と書いているが¹²、実のところ器としての出来はやや物足りなかったのではないだろうか。それというのも村瀬善九作とされる5点の作品は、大量生産品のような無個性な形で作られているからである。善九がいかなる人物だったのかについては、瀬戸で活動していたということ以外は分かっていない。瀬戸ということであれば北川の知己を得ていた可能性も少なくはない。いずれにしろ、一般の購入者向けにシンプルな形を心掛けたのか、あるいは主役である絵を引き立たせるために、絵付けのしやすく、かつ見栄えのする形にしたのだろうか。だがこのような器は、茶席での使用には余り適していない。

木村にしてみれば、器としても通用する造形で、なおかつそこに熊谷の絵付けがなされているものを欲したのではないだろうか。欲しくなればすぐさま行動に移すのが木村定三というコレクターの信条である。趣味の陶画展終了後の5月か6月には熊谷と連れだって、再び瀬戸を訪れたと思われる。

この時の器を作ったのは早川春泰である。善九と同様、この早川に関しても詳しいことは分かっていない。しかしながら、瀬戸で活動し、大正のころには数寄者として知られる益田鈍翁（1848～1938）が春泰の元を訪れたという記録が残っていることから、当時の茶人の

12 前掲『熊谷守一作品撰集』12頁。

間ではかなり知られていたようだ。コレクションの中には、志野茶碗7点を含む計10点の春泰の作品（熊谷絵付けのものを除く）が含まれていることから、木村は春泰を高く評価していたと考えられる。木村が主催した茶会にはこの中から《黒色尉》(M824) (図14) と《狂言面》(M828) 2点の茶碗が使われており¹³、特に《黒色尉》の方は熊谷が箱書きをしていることから、木村の春泰に対する評価はかなり高かったという事が出来る。

立て続けに二度も瀬戸を訪れたこの年は、熊谷にとって陶芸に深く関わった時期だったのである¹⁴。

巨匠への挑戦

書簡0480に見られるように、木村は熊谷宅を訪れるだけでなく、度々名古屋の自宅に熊谷を招いていた。木村家で飼っていた犬を描いた《犬》(JJ200200025000) や、家の地袋の袋戸に直接筆で描いた《たんぼぼ図地袋》(M2846)などは、木村家で滞在中に生まれた作品である。熊谷をもてなす木村が、自慢のコレクションを熊谷に見せびらかしていたことは想像に難くない。それは時には、かの名品に匹敵するような絵を描いて欲しい、という「おねだり」に発展することもあった。《鳶》(M209)、《大鵬》(M218)は、浦上玉堂の《山紅於染図》(M2891)への挑戦を頼まれた熊谷が、苦心しながら描いた作品であると思われる¹⁵。

書簡0630の中の蕪村展の感想は、前年に開催された蕪村名作展を見た熊谷の感想であるが、夜の雪景は少し寂しく、手前に松のある富士の方が明るくて良い、とは即ち傑作として名高い《夜色楼台図》よりも木村の所有する《富嶽列松図》(M2890)の方が良いという意味である¹⁶。これを受け取った木村が狂喜したであろうことは言うまでもない。この蕪村の件は、どうやらまた別の「おねだり」につながったようで、またもや熊谷が苦心して蕪村の《富嶽列松図》に挑戦した形跡が残されている¹⁷。思いついてしまったら最後、自分の願望を叶えずにはいられない木村と、懇願されるとなかなか断れない熊谷のせめぎ合いともいえる、こうした二人のやりとりもまた、想像してみると非常に微笑ましいシーンではないだろうか。

箱書きについて

木村にとって、熊谷が他の画家とは異なる特権的な位置にいたことを端的に示すのは、コレクションの中で特に木村のお気に入りの作品（これがいわゆる世間一般でいう名品とイ

13 1997年5月7日、「東海道膝栗毛 富士遠望船中遊楽茶会」『木村定三コレクション研究報告書2』愛知県美術館、2008年、41頁。

14 後に熊谷は自ら手びねりで黒楽茶碗を焼いている。その際、窯での焼成は八事窯として知られる二代中村道年が担当したことが伝わっている。前掲『熊谷守一作品撰集』12頁。現在、豊島区立熊谷守一美術館に所蔵されている黒楽茶碗も同様の経緯で生まれたものであろう。二代道年については下記に詳しい。『名古屋の楽焼—八事窯 中村道年へのあゆみ』愛知県陶磁資料館、2010年、135頁。ちなみにコレクション中、二代道年の作は《窯変黒楽茶碗》(M856)、《赤楽樹花入》(M2292)の2点、三代道年の作は《赤茶碗》(M855)が1点含まれている。

15 古田浩俊「一『鵬』をめぐる一」、前掲『木村定三コレクション研究報告書2』23～26頁を参照。

16 同展のカタログによって《夜色楼台図》と《富嶽列松図》の2点とも出品されていたことが確認できる。『蕪村名作展』日本経済新聞社、1957年。

17 詳しくは福井淳子による本紀要掲載の文章（88～93頁）を参照。

コールでないことは極めて重要である)には、熊谷に箱書をさせていることである。熊谷作品の箱書を熊谷本人がしているのは当然としても、それ以外の作品でも書画、骨董を問わず箱があるものには熊谷に箱書をさせている。3,000件を超えるコレクションの内、熊谷以外の作品でそうした例がいくつあるのかはまだ調査中で正確な数は把握できていないが、恐らく50件程度はあるのではないだろうか。

そもそも箱書とは一種の鑑定書であり、その道の専門家が見極めた作者なり銘なりを記するのが習いである。そして当然のことながら、同時代の洋画はさておき、近世絵画や朝鮮陶磁、その他の工芸品に関して熊谷が見極めを出来るはずがない。つまり常識的に考えれば熊谷による箱書とは、世間一般の箱書とは異なる機能をもったものであり、極めや伝来を示すものではなく、木村自身の好みを記しておくための印、例えるならば現代のSNSにおける「いいね」のようなマークに他ならない。

書簡0020にあるように、最初に入手した作品から既に熊谷に箱書を依頼していた木村は、この箱書の字に魅了され、単独の書の作品として所蔵すべく、《心月輪》(JC200200002000)を嚆矢として書の収集にも力を入れていくのである。箱書は後に多産されることになる書の作品の引き金となった、重要な契機といえる。

この箱書に関して興味深い作品があるので紹介しておこう。《安南茶碗 銘 入船》(M551)(図15)は、とほけた表情の船頭が描かれたベトナム製の茶碗である。この茶碗の箱蓋の裏には「入船や ぶくぶく福と 泡立てて 九十七才 守一」と書かれており、さらに箱の中には同じ文言が書かれたメモが入っている(図16)。恐らく耳が遠くなった熊谷に、正確に箱書の内容を伝えるためにメモを用意したのだろう。また図柄にちなんだ句を詠んで、それを銘にしたこともうかがえる。木村は特に気に入った作品には、こうした川柳や狂歌をつけることがあり、さらにこの茶碗は茶会で使われたこともあったので¹⁸、彼がこの絵柄の可愛らしさを愛好したことが分かる。可愛らしさは木村氏の好みを考える上での重要なキーワードである。

肉眼では分かりにくいですが、この茶碗の外側には3つの小さな膨らみがあり、手に持つことでやっとなり気が付くことが出来る。成形上の不具合を味と見なして、3つの膨らみを「ぶくぶくぶく」と船の航跡の泡、そして抹茶の泡に見立てる。そして最後の「ぶく」を熊谷の長寿を祝う意味で福とかけて、句に仕上げているのである。当然、箱書を書いてもらっている間に、句の意味を伝えているであろうから、熊谷にも茶碗を持たせて茶碗の特徴を指し示したかもしれない。自分のお気に入りの作品を前に熊谷と語らうという、至福の時を過ごしている木村の破顔一笑がありありと目に浮かんでくるのである。

書簡が伝えるもの

これまで見てきたように往復書簡を細かく読み込んでいくと、熊谷守一と愛知という土地の間には、意外なほどに密接な関わりがあったことが分かる。熊谷といえば出身地である岐

18 1987年10月11日、上飯田茶会。前掲『木村定三コレクション研究報告書2』、36頁。

岐阜が重要な場所であるのは勿論だが、ある時期以降は岐阜よりも愛知に来る機会の方が多かった。それは偏に、熊谷を慕って強く来訪を勧める友人たちが、愛知には特に多かったからである。そのネットワークの中心にいたのは他でもない木村定三だが、木村以外との交流においても、人とのつながりから生まれた作品や出会った人々に残した印象など、愛知には様々な形で熊谷の影響が残されているのである。木村定三コレクションの中の200点以上の熊谷作品が、最終的に愛知県美術館で保管されることになったのも、このような人と人の縁がもたらしたものだといえるかもしれない。

この往復書簡によって我々は木村と熊谷の二人が積み重ねた交流の、ある種の体温を感じることが出来るだろう。とりわけ（今回は一部の書簡しか図版を掲載できなかったが）、直筆の文字が持つ情報量はとてつもなく多い。木村は敬愛する年上の画家に対して、初期においては多分に緊張感の漲る手つきで、一つ一つの文字を刻みつけるように自分の思いを込めて綴っていた。一方の熊谷の方はといえば、余程手紙をしたためるのが億劫だったのだろう。必要最低限の内容でとどめておく場合が多いが、そんな中にも時折、木村を気遣う言葉や、訪問を楽しみにしている様子が見え隠れする（そもそも、自ら進んで文章を書く人間ではなかったために、熊谷の直筆の文章がこれだけまとまって残っていること自体がまずもって貴重である）。それぞれが思いやりと共に相手に送り届けた言葉は、作品制作の合間や、部屋で作品を鑑賞している際などに、ふと思い出されていたのではないだろうか。

今回翻刻した60通余りの書簡のほとんどは、戦前戦中に交わされたやりとりである。戦争が迫りくる頃に初めて出会った二人は、作品を描いて送る画家とそれを受け取って対価を支払うコレクターとしての関係を続けながら、年の離れた友人としての友情と敬愛も深めていった。決して明るくはなかったはずの時代にありながら、互いを気遣い、そして芸術を愛し邁進していく二人の姿は、生きることの意欲に満ちていて眩しさすらも感じさせる。戦争末期のやりとりは残されていないため、日々の戦況に対して二人がどのような言葉を交わしていたのかは定かではない。だが書簡0460にあるように、上空を飛ぶ敵機とそれを迎撃する高射砲を見上げて、迫りくる敗戦を予感していたのかもしれない。書簡0450には、数日後に木村が熊谷宅を訪れる旨が書かれている。その訪問日、昭和16年12月8日は、真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まった日である。二人は開戦を伝える臨時ニュースや号外を見聞きしていただろうか。もし知っていたのならば、どんな会話がなされたのであろうか。往復書簡はこのように、二人が交流を深めていった日々の、その背後に流れていた時間についても思いを至らせてくれる。

最後にこの往復書簡の持つ意義を明らかにしておきたい。これらの書簡が伝えてくれる一番のものは、木村定三という人の熊谷に寄せる心のありようである。書簡0080には、弟の四郎が家族だからこそ書ける兄・定三の様子を包み隠さず書き残している。「守一さんから返事がこんか」、「うちからまだ守一さんの手紙がきたとってこないなあ」と、何度も確かめずにはいられない木村の様子は、まるでプレゼントを心待ちにしている子どものようである。木村は熊谷の純粋な人柄に心酔していたが、自らもまた、子どものような純粋さで熊谷の作

品を愛すがゆえに、その絵がいつ届くのかと待ちきれず、つい催促の手紙を送ってしまう。

コレクターは何よりもまず、このような作品への抑えきれない愛によって突き動かされているのである。木村定三コレクションは、単に3,000点余りの作品が集まっただけのものではない。その中心には木村が作品に寄せた熱い思いがあり、作家と様々なやりとりを経て一点一点数を増やしていったという経緯がある。木村には自身のコレクション活動を通して学び、作品から受けた精神的感銘によって自らの人格を向上させようという意思があった。だからコレクターとそのコレクションの研究は、決して作品の調査研究だけではなしえない。コレクターが作品に対して抱いていた思いを理解しなければ、膨大な作品と作品をつなぎとめていたものは見失われ、そこにはランダムな物体が残されるだけである。木村が受けた感銘、そして作品へ注いだ愛情は、箱書の川柳や銘などを除けば、わずかに残された文章によって伝わるのみであった。しかしこの往復書簡には、その不足を補って余りあるほどに赤裸々に綴られた作品への思いが満ちている。今回掲載した書簡が、木村定三というコレクターを研究するための資料として、欠かすことの出来ない第一級の重要性を持っているのはそのためである。

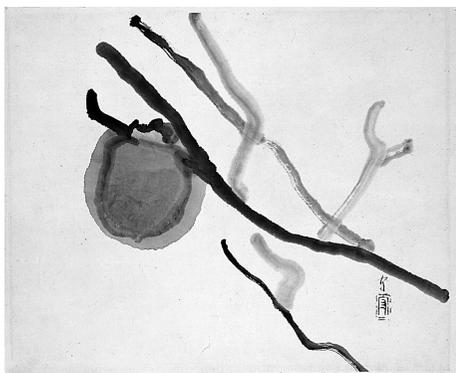


図8 熊谷守一《柿》(M2460)
制作年不詳 紙本墨画淡彩
41.0×49.2cm



図9 熊谷守一《観世音菩薩》(M211)
1940年 紙本墨画 135.4×34.6cm (左)
熊谷守一《不動明王》(M201)
1940年 紙本墨画淡彩 128.4×34.9cm (右)

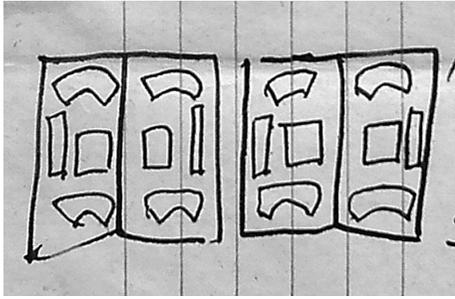


図10 東本春水による図（書簡0370より）



図11 熊谷守一《秋冬貼交屏風》(M1854)
制作年不詳 169.6×174.4cm

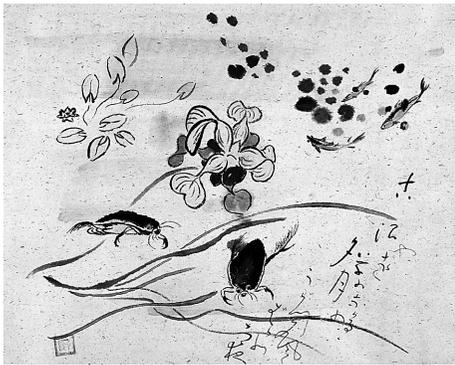


図12 小川芋銭《古沼や》(M1831)
制作年不詳 紙本墨画淡彩
43.2×53.3cm

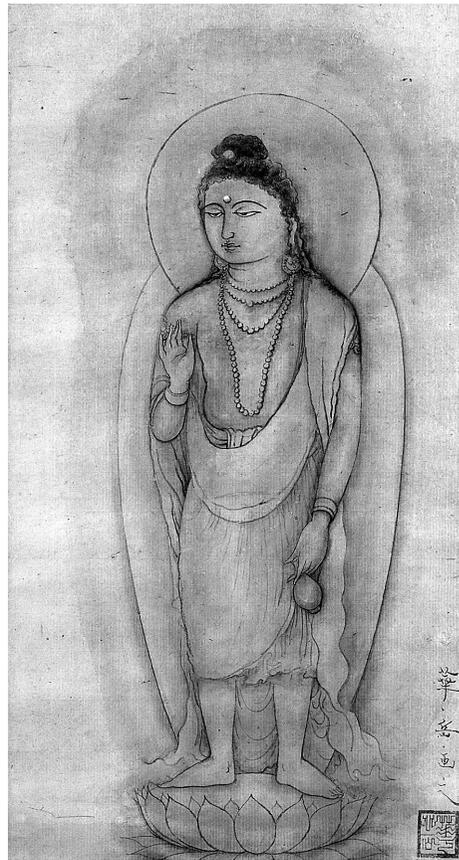


図13 村上華岳《仏立像》(M1889)
1937年 紙本墨画淡彩 55.9×29.6cm



図14 《志野茶碗 銘 黒色尉》(M824) 20世紀 6.6×13.6×11.5cm



図15 《安南茶碗 銘 入船》(M551) 17世紀 9.5×12.0×12.0cm

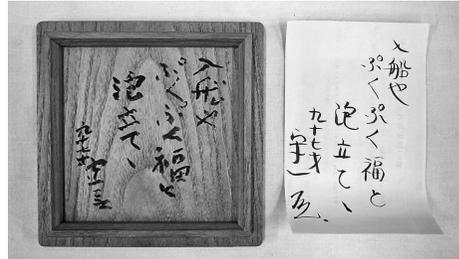


図16 《安南茶碗 銘 入船》(M551) の箱書とメモ

※本稿の執筆にあたっては多くの方のご理解、ご協力を賜った。まずは書簡の公開に関してご許可を頂いた木村美保子氏、熊谷樵氏、豊島区立熊谷守一美術館、そして岐阜県歴史資料館にお礼申し上げます。特に木村美保子氏には文中でも触れたように、手許に保管されていた書簡を追加でご寄贈頂いた。このことがなければ、そもそも本稿の執筆は不可能だったろう。重ねて感謝の意を表したい。福井淳子氏には筆者と共同で翻刻の作業にあたって頂いた。行き届いた註をはじめ翻刻が充実した資料になったのは、氏の尽力に負うところが大きい。また、岐阜県美術館の「守一のいる場所」展から引き続き、今回も廣江泰孝氏、松岡未紗氏には貴重なご助言、ご協力を頂いた。また四代中村道年氏、愛知県陶磁美術館の神崎かず子氏、天童市美術館の池田良平氏にも重要な情報をご教示頂いた。記して心からの感謝の意を表したい。



图8 熊谷守一《柿》(M2460) 制作年不詳
紙本墨画淡彩 41.0×49.2cm



图11 熊谷守一《秋冬貼交屏風》(M1854)
制作年不詳 169.6×174.4cm



图12 小川芋銭《古沼や》(M1831)
制作年不詳 紙本墨画淡彩 43.2×53.3cm



图13 村上華岳《仏立像》(M1889)
1937年 紙本墨画淡彩 55.9×29.6cm

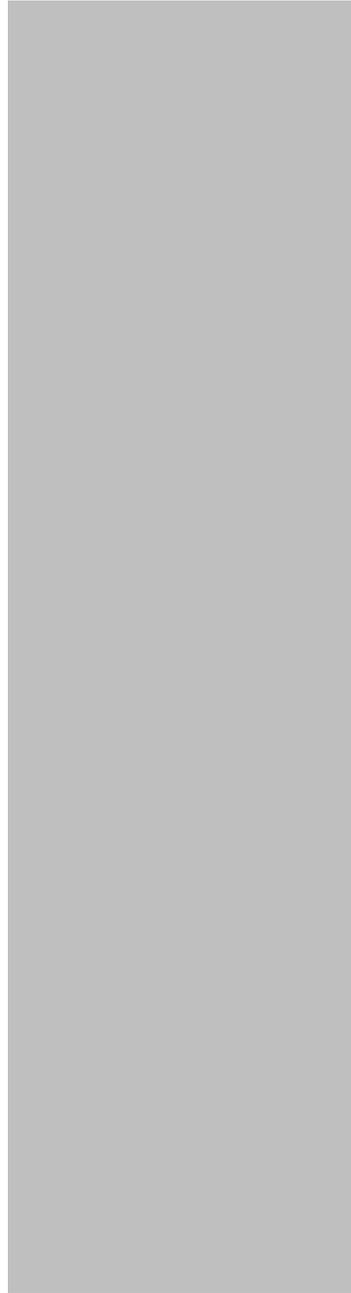
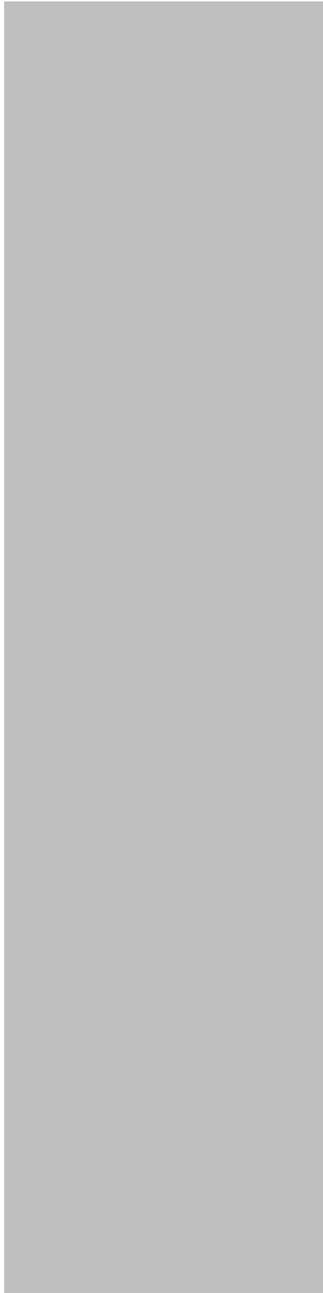


図19 熊谷守一《觀世音菩薩》(M211) 1940年 紙本墨画 135.4×34.6cm

図20 熊谷守一《不動明王》(M201) 1940年 紙本墨画淡彩 128.4×34.9cm



図14 《志野茶碗 銘 黒色尉》(M824)
20世紀 6.6×13.6×11.5cm



図15 《安南茶碗 銘 入船》(M551) 17世紀
9.5×12.0×12.0cm



図18 案内状 (書簡0640)